

隼人の楯

現在、西都原考古博物館では特別展「化内の辺境～隼人と蝦夷」が9月4日（日）まで開催されています。その中で特に目を引くのが3体のマネキンが手にしている原寸大の隼人楯（レプリカ）です。

「隼人楯」は大和朝廷に服従した隼人が、平城宮での警備や儀式の際に持っていた木楯です。隼人のことが書かれている『延喜式』には隼人楯について「長さ五尺(縦 150 cm)・広さ一尺八寸(幅 54 cm) 厚さ一寸(3 cm)、頭に馬鬣(頂部に馬のたてがみ)を編著し、赤白土・墨をもって鈎形を蛋く」と記されていますが、具体的に楯の形態や文様については長い間知る事ができなかったのです。



ところが、1965（昭和 40）年、平城宮跡で井戸枠に転用された木楯が発見され、表面に墨で塗られた三角文と逆S字状の模様や枠取りの線などが描かれていたことから、この木楯が「隼人楯」と確認されたのです。展示されている左右の木楯が出土した隼人楯のレプリカです。（本館所蔵）



木楯に描かれた文様を復元すると、全面には赤・白・黒の三色で大きく描かれた逆S字状の連続渦巻文（鈎形）、上下には赤・黒2段のギザギザの連続三角文（鋸歯文）が再現され、頂部に連続してあけられていた小さな孔には馬の鬣が通されていたと判断されました。展示されている中央の楯が彩色を復元した隼人盾の模造品（県総合博物館所蔵）です。「隼人楯」は大きさや重さ、裏面に取り付けられた握り手の位置などから片手では持ち上げるのに難しいことから、握り手をもち片膝をつけて使われた置き楯と思われます。（展示では両手で楯を抱えています

が…。）

『延喜式』には儀式の際に使われた隼人楯が「一百八十枚」と記されています。楯の全面に赤・黒・白で彩色された鋸歯文や渦巻文が描かれ、頂部からは馬鬣が垂れ下がる人の背丈ほどもある楯が置き楯の状態でも数十枚も並び置かれた光景からは、その異様さと、異族を象徴する道具としての存在が感じ取れます。では、なぜ隼人楯は井戸枠に転用されたのでしょうか…。それは、中央集権国家の完成とともにその役割を終えた隼人の存在が記録からも消え、服従した者の象徴としての役割を終えた盾が、井戸枠として転用されたことを物語っています。

そんなことを思い浮かべながら特別展「化内の辺境～隼人と蝦夷」を是非ご覧下さい。
(永友良典)

写真【上】隼人楯レプリカ（本館所蔵）と彩色復元模型（総合博物館所蔵）

写真【下】隼人楯の握り手復元（彩色復元模型裏面）